

Walter S.

Gibson ケース・ウェスタン・リザーヴ大学教授(アメリカ)のアポイントメント・プログラム招請について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学国際交流センター 公開日: 2009-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 森, 洋子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/4745

VIII Walter S. Gibson ケース・ウェスタン・リザーヴ大学教授 (アメリカ)のアポイントメント・プログラム招請について

理工学部教授 森 洋子

1. ギブソン教授のプロフィール

現在、U. S. Aのケース・ウェスタン・リザーヴ大学で教鞭をとられているギブソン教授の専門は北方ルネサンス美術、とくに15世紀後半から16世紀初期に活躍したヒエロニムス・ボスト、16世紀中期のピーテル・ブリューゲルである。ギブソン教授の代表的な著書は以下の4点といえよう。

Hieronymus Bosch, Thame and Hudson, London, New York, 1973
(German edition 1974, Dutch edition 1974).

Bruegel, Thames and Hudson, London, Oxford University Press,
New York, 1977 (Dutch edition 1977).

Hieronymus Bosch: Annotated Bibliography, G.K. Hall, Boston,
1983.

Mirror of the Earth: Princeton University, New Jersey, 1989.

ギブソン教授のボス研究の特色は、これまでこの画家がアダム派という特殊なセクトに属していたとか、異端の画家という極論に終止符を打つものであった。1974年の上掲書で、ギブソン教授は豊富な15世紀の記録、古文書、写本挿絵、木版画などを紹介し、15世紀末から16世紀初期にかけての宗教、思想、民間伝承、文学とボスの作品との具体的な関連性を立証し、世界の研究者から注目された。他方、同教授のブリューゲル研究は、この画家に対する社会主義的な解釈を批判した好著である。とくにブリューゲルの時代の世界観、人間観を同時代の人文主義者の著述や、修辞家集団の上演した戯曲から分析し、高く評価されている。

このほか、数多くの研究奨励金や補助金がギブソン教授の研究に与えられ

ている。また1975年、ベルリンでのブリューゲル・シンポジウムで招待発表を、1985年のピッツバーグ大学のネーデルラント美術学会では、基調講演を行っている。1970年以来、アメリカ各地の大学に招待講演に招かれ、対外的には、ユトレヒトの美術史研究所、ブリュッセルの自由大学、ロンドンのコートールド美術史研究所など、世界各地の大学や研究所から招聘されている。

2. 招請期間と講演

1990年10月15日から10月25日 10日間

講演（英語）

第1回 1990年10月16日 本学6号館622教室 16時～17時20分

“Hieronymus Bosch and the Vision of Hell in the late Middle Ages”

（主として文学部の3，4年生を対象，約150名出席）

第2回 1990年10月24日 本学研究棟第4会議室 17時～19時30分

“Artist and Rederijkers in the Ages in Bruegel”（本大学および他大学の教員および学生の参加したセミナー，31名出席）

3. 講演の内容

第1回の内容は別冊の講演録で報告したので、参照されたい。したがって本稿では、第2回の講演とセミナーについて述べよう。案内状で演題を「ブリューゲルの時代の芸術家たちと修辞家集団」と訳したように、ギブソン教授はその講演のなかで、数多くのスライドを投影しながら、16世紀中期の絵画作品が同時代の修辞家集団Rederijkersの戯曲のテーマや内容をいかに反映しているかを説明された。修辞家集団とはアマチュアの詩人や芸術家によって構成された演劇グループで、ネーデルラントのどんな小さい町でも最低ひとつのグループがあったといわれる。かれらは毎年の宗教行列の企画や、また3年1回の国内戯曲コンクールLandjuweel（国内の政情が不安定ときは20年間も中断されることがあった）に参加し、新作を上演するのを主な活動とした。ギブソン教授の講演の主旨は、当日配布された資料（同教授の発

表論文・著書のリストおよび修辞家集団に関する参考文献とともに) あるので、以下、掲載しよう。

Artists and Rederijkers in the Age of Bruegel (summary)

The *rederijkers*, or rhetoricians, were literary societies that flourished in the Netherlands during the late Middle Ages and Renaissance. Their influence culminated during the sixteenth century, and there existed many close relationships between the *rederijkers* and artists who were contemporaries of Pieter Bruegel.

Organized in *kamers*, or chambers, the *rederijkers* wrote and presented songs, poems and dramas on numerous public occasions. The *rederijkers* also held literary competitions, or *landjuweelen*, of which the most famous was the *landjuweel* organized by the *Violieren* chamber at Antwerp in 1561.

Of greatest interest is *rederijker* drama, which consisted of *kluchten* (farces), *facties* (satirical comedies), and *spelen van sinne* (moralities or allegorical plays). The *facties* and the *spelen van sinne* were often topical in nature, commenting on the religious, political, and economic issues of the day.

It is not known if Bruegel was a *rederijker*, but the *rederijkers* numbered many artists among their members. Some artists were poets themselves; other artists collaborated with the poets on many *rederijker* projects, including the allegorical floats that appeared in the annual religious processions. Because of this close association in the *rederijker* chambers, artists and poets not only shared a common fund of subject matter, but they also directly influenced each other in their choice and treatment of allegorical subjects.

セミナーの参加者の大半は演劇、文学、西洋美術史の専門家であったので、講演後のディスカッションは非常に学際的であった。とくにネーデルラント

の修辞家集団の歴史や活動内容は、同時代のドイツ、フランス、イギリスにない、母国語（オランダ語）の保護政策的な意図もあり、さらに16世紀中期の宗教改革の影響が戯曲のテキストに反映されているため、このセミナーに出席された演劇や文学関係の研究者の関心をひき、たくさんの議論が交わされた。また、こうした戯曲の内容がアントウェルペンで挙行された年1回のマリア被昇天祭の出車行列の寓意的テーマや宗教版画の図像にも影響を及ぼしたことに関し、美術史の研究者から質問が出された。予定時間を30分もオーバーした熱心な意見の交換によって、大変、アカデミックに充実したセミナーであったといえよう。ギブソン教授、参加された研究者、大学院の学生、準備をしてくださった国際交流センターの職員の皆様に、紙面をお借りしてお礼を申しあげたい。

ギブソン教授はU. S. Aに帰国されてからも、セミナーで質問された研究者たちと文通で交流をつづけられ、文献上のご協力もされたと伺い、当事者として大変うれしく思っていることを、付け加えたい。

4. 明治大学以外での活動

ギブソン教授の夫人サラ・スコット・ギブソン博士は、現在、U. S. Aのスターリン・アンド・フランシン・クラーク・アート・インスティテュート美術館図書館長をされておられる。同博士は米国のアート・ライブラリー界のオピニオン・リーダー的な存在であるため、その著書や論文はわが国でも広く知られている。今回、ギブソン教授の来日に同行されるというので、日本のアート・ドキュメンテーション研究会は、同博士を招き、1991年10月17日、東京アメリカン・センター・ホールで「アメリカのアート・ライブラリー——21世紀に向かって」という講演会を開催した。同博士の講演は、当然ながら、アート・ライブラリーを利用する実際の美術史の専門家による問題提起や発言によって、より具体的な内容を開陳するものといえよう。講演後のディスカッションで、ギブソン教授は日本人のアート・ライブラリアンの聴衆に対し、アメリカの大学での美術史の講義や学生の勉強、また美術館の

学芸員、アーティスト、デザイナーの仕事に、どのような側面から、アート・ライブラリーが貢献しているかについて詳細な説明をされ、ひじょうに有意義であった。筆者はまた日本での実情を訴え、アート・ライブラリアンに要望を述べる機会をもつことができた。参加者たちは講演やディスカッションによって、日米の比較ができ、まだ設備だけでなく、職制としても十分に認知されていないわが国のアート・ライブラリーの今後の課題に大きな示唆を与えたように思われる。

ギブソン教授はサラ博士とともに、東京麻布の都立中央図書館や京都国立近代美術館にも招待された。とくに図書館特別文庫室では江戸、明治時代の貴重な古地図や明治の錦絵を調査された。また美術館ではその年の夏、「ブリューゲルとネーデルラント風景画展」が開催され、ギブソン教授はカタログに巻頭論文「ピーテル・ブリューゲル<父>と16世紀フランドルの世界風景画」を寄稿されたので、学芸員との交流が行われた。また同美術館は当時、「移行するイメージ—1980年代の映像表現展」を行っていたので、会場でも企画担当の学芸員と熱心なディスカッションがなされたと伺っている。

5. 研修旅行

わずか10日間の招請期間のうち、このような多忙な日程をこなされ、さらに5日間、奈良、京都の古寺や神社、博物館などを美術史家として、専門的に見学された。筆者はその中の2日間、ご夫妻を案内したが、建築様式や造形表現における西洋と東洋の美意識の相違や、バロック庭園と寺院の石庭のイコノロジーを比較するなど、啓発的な意見交換をすることができた。なによりも、10月22日の京都での「時代祭り」見物は、16世紀中期アントウェルペンでの宗教行列（前述）の出車とその寓意表現との比較において、わたしたちのディスカッションの格別のテーマとなった。それは、上に報告した第2回のセミナーにおいても言及された。ギブソン教授と筆者は専門や方法論も非常に近く、しかも20年来の友人であるが、このように何日間にもわたり、さまざまなテーマについてディスカッションをしたり、講演の内容について

質問やコメントをし，当面の研究についての情報交換をするなど，貴重な体験をすることができた。このような恵まれた機会を与えてくださった明治大学および国際交流センターに深く感謝いたしたい。